航空ファン
THE KOKU-FAN
ワイドカラー
WIDE COLOUR
カーチス
P-40
Lufthansa
☆特集☆
アラスカ航空軍団（AAC）の装備機
巨人輸送機ロッキード C-5A の全貌
60用RC曲技機・ファイアホール60B
'72
APRIL
4
$ 2 30

ベトナム戦のファントムII

タイ国のウドン基地に駐留する第432戦術偵察航空団のRF-4 [illegible]

〔上〕7ページと同じくウドン基地の第14戦術偵察飛行隊のRF-4C。
〔下〕南ベトナムのタンソンニュート基地に駐留しているRF-4C。第460戦術偵察連隊第12戦術偵察飛行隊の所属機でシリアルは67-449A。

91-1138
02-4758
571

NAVY
XF
NAVY

CAF 409
U.S. AIR FORCE

初飛行した S-3A 対潜機

去る11月初めにロールアウトした米海軍の新鋭艦上対潜機S-3A原型1号機が、1月21日、カリフォルニア州パームデールのロッキード・テスト飛行場を離陸、1時間42分の初飛行に成功した。前ページおよび上・下の写真はモハビ砂漠上空を飛行中の同機。この初飛行では高度2万フィートまで上昇、最高速度200ノットで飛んだという。

カラーフル・ジャンボ 747

アリタリア航空のB 747

アメリカン航空のB 747

ノースアメリカンP-51B戦闘機　第4戦闘大隊第336戦闘中隊のエースとして有名なドン・ジェンタイル大尉の乗機　塗装は上側面オリーブドラブ　下面ニュートラルグレイで　主尾翼には識別用の白帯が巻かれている　スピナと機首はこの写真では白と赤だが　後に赤一色に塗りかえられた　なお機首に描かれているのはボクシングのグローブをつけたワシで　これが戦後336戦闘中隊のシンボルとなった

ノースアメリカン P-51D ムスタング

現在アメリカでエアレースなどに出場して飛びまわっているムスタング(N5445V シリアル4
44-73287) 写真は去る7月、サンディエゴのブラウン・フィールドでおこなわれた1967 USカップ
レースに出場したとき、同飛行場で撮影したもの。レース・ナンバー4をつけ、ビル・ジャクソンが
操縦していた。

BELL
P-39 AIRACOBRA
Revell
1 2 P 39N G.C.I 4 NAVARRE FREE FRENCH A.F. NORTH AFRICAN COASTAL COMMAND ALGERIA 1944
3 P 39D 39TH PURSUIT SQDN REDESIGNATED 307TH SQDN OF 31ST FTR GR MAY 1942
4 P 39D FLOWN BY LT LESLIE SPOONTS OF 57TH FTR SQDN 54TH FTR GR. USAAF ALASKA JUNE DEC 1942
218786
6
170'73
31

ベル P39Q 戦闘機 エンジンを胴体の重心位置に装置してプロペラを延長軸でまわすという画期的な形式を採用したP39は 中央部が太くて前後がしぼられた かつおぶし形の特徴ある胴体でおなじみの戦闘機である 写真の機体はもっとも多く造られた最終生産型のQ型で 上側面オリーブドラブ 下面ニュートラルグレイの標準塗装

ヘル P-63A キングコ

P-39エアラコブラをもとし開発
空軍博物館が保管
みは43 1172機。

DX
8165
MARINES

セスナA-37B攻撃機

基本練習機T-37をもとに開発した米空軍のCOIN機A-37B。ベトナム戦に投入して評価テストを行なったA-37Aの性能向上型がこのB型で、機首に空中受油ブームを装備し、武装の搭載量も増えている。全部で327機が生産されることになっており、1号機は4年前の1968年に空軍に引渡されている。写真の機体はNo.68-7953機で、主翼

インスタント攻撃機
ブリテン・ノーマン　デイフェンダー

アイランダー旅客機を改造したブリテン・ノーマン　デイフェンダー機は　インスタントの安価な　攻撃機　である。
主翼下面のパイロンには　内側で3.5kg　外側で1.4tまでの武器を懸架できるほか　胴体内にも各種の特殊機器が　できる。哨戒、偵察、FAC（前線空中指揮）兵員輸送　貨物や患者輸送など一幅広く使えると宣伝されている。

川崎５式戦闘機

THE KAWASAKI KI100 FIGHTER PROTOTYPE IN ITS ORIGINAL UNPAINTED CONDITION PROBABLY AT KAWASAKI GIFU PLANT IN SPRING 1945

液冷のハ-140エンジンの不調と生産遅延で"首なし機"がぞくぞく誕生する…となった3式戦飛燕。窮余の一策として、急きょこれに空冷のハ-112IIエンジンを積んだのが陸軍最後の制式戦闘機5式戦（キ-100）というのは、大戦機ファンには周知のところ。応急に造られた戦闘機ではあるが、これがまた意外に高性能で、本土防空戦に大活躍することになるとは皮肉である。

上と下の2枚の写真は、空冷エンジンにかえたばかりのその試作機。3機造られたうちの1機である。最大幅84cmのスマートな胴体に、直径1218mmのハ-112IIエンジン装備。あたまでっかちを修正するための川崎の技術陣苦心の改修であった。試作機では胴体はもちろん風防そのまま。のちに水滴風防に改められている。

中島97式戦闘機

昭和12年12月に制式採用された陸軍で最初の低翼単葉戦闘機97戦は　当時の世界最大傑作機の一つ。ノモンハン事件ではソ連製のイ16、イ15を寄せつけず　太平洋戦に入っても　固定

アラスカ航空軍団

(Photos by the courtesy of Maj. M. C. Pickering)

F-106A Delta Dart of the 317th FTS.

THE AIRPLANES OF THE ALASKAN AIR COMMAD

F-102A Delta Dagger of the 317th FIS

ベーリング海をへだててシベリアと対峙するアメリカの北端アラスカを護るアラスカ航空軍団（AAC）。その主任務は、北の空の防空と米本土に対する攻撃警報。本拠地はエレメンドルフ空軍基地（Elmendorf AFB）で、ここに司令部と主力航空部隊第21混成航空団を置いて、アラスカ全土からグリーンランドにおよぶ各基地の30以上の警戒隊を統かつしている。

北米防空司令部（NORAD）のアラスカ地区司令部もここにあり、極東に飛ぶ空輸軍団のC-141、C-5の中継地としてもよく知られている。今回はそのAACの主力機とエレメンドルフに配備されている各機をご紹介することにしよう。

47ページはF-106Aデルタ・ダート、前ページとこのページはF-102Aデルタ・ダガーで、ともに第21混成航空団傘下の第317戦闘迎撃飛行隊の所属機であったものだが、同飛行隊は1969年12月に解隊。現在はF-4Eを装備した第43戦術戦闘飛行隊がその任をひきついでいる。写真はいずれも1969年の撮影である。

0-54254
U.S. AIR FORCE

フォート ニュース

(上左) ブリテン ノーマン アイランダーの軍用型ディフェンダー 機首にレーダーを積み、主翼下の4ヵ所のパイロンに武装ができるようにしたもので、そのほか機体構造はほとんどアイランダーと変りないが、主翼はトライランダーなみに翼幅が延長されている。エンジンは260HPのO-540から300HPのIO-540までライカミングの6気筒エンジン各種が取りつけられる。

〔下〕1969年5月に陸軍からの発注がとり消されたリジッド・ローターの武装ヘリAH-56Aシャイアンではあるが、その後開発予算の復活でロッキード社と米陸軍の手によってひきつづき研究開発がつづけられている。これまですでに1577飛行時間を記録、最高は時速408kmのスピードを出し、対戦車ミサイルの発射も成功するなど、要求性能を上まわる結果を示しているという。写真は米陸軍ユマ実験場でのスナップ。

〔上〕AV-8Aハリアーを装備した海兵隊の最初の前線攻撃飛行隊（VMA-513）は現在サウスカロライナ州のビューフォートを基地に訓練中であるが，写真はその1機で主翼下にサイドワインダーAAMと120ガロン増槽を吊して飛行中。なおVMA-513は海兵隊第32航空大隊（MAG-32）に所属し，同大隊のほかの2個飛行隊VMA-331とVMA-324もまもなくA-4Mを装備して編成を完了することとなっている。

〔上〕COIN機セスナA-37B。B型は南ベトナムの実戦テストで好評だったA-37Aの性能を向上したもので，327機が生産されることになっている。（photo by R.M.Hill）〔下〕1972年に入ってコンコルドの開発は急ピッチ。1月8日には写真のように001，002の両原型と唯一試作型の01の3機がイギリスのフェアフォードに勢ぞろいして威容を誇示した。

連合国空軍の
かげの功労者

カーチス P-40

CURTISS P-40 WARHAWK · TOMAHAWK KITTYHAWK

未発表
陸軍機写真集
川崎　99式双発軽爆
KAWASAKI KI-48 TWINE-ENGINED LIGHT-BOMBER (LILY)

KI 48 PROTOTYPE

〔上2枚〕北京の南苑飛行場で中国空軍の手に渡った一式双軽2型（Ki-48II） 1945年12月10日の撮影で 同機は青天白日のマークにかえて 中国空軍の任務に飛んでいるもの 日本軍のパイロットと整備員もそのまま残って協力しているところ。同飛行場には当時アメリカ海兵隊のMAG24（第24航空大隊）も駐留しており 上の写真で両端はその隊員 左から二人目が日本人パイロットで 中の二人は中国空軍パイロットである

〔右〕一式双軽の操縦席内計器盤 中央の操縦桿の左側には 排気ガス計 燃料油圧計 発動機回転計(左) 吸入圧力計(左) 吸入圧力計(右) 燃料油圧計などが並んでいる。

スピットファイアの戦闘記録（その8）

（上・右ページ上）先月号にひきつづき ユニバーサル・ウイング C翼 をつけたスピットファイアF Mk Vc。右ページ上の機体は熱帯用フイルターを装備した南アフリカ空軍第2中隊の各機で 胴体下に爆弾を吊してイタリーのサングロ河近くの目標を攻撃に向うところ。

上　写真偵察型のスピットファイアMK ⅣPR Ⅴ型(カメラを装備したもので エンジンは同じ1000HPのマーリン46 3種類のカメラを積むことができ、スピットファイアでは最初の写真偵察型で300機近く作られている。

(左) スピットファイアF MK Ⅵ。Ⅵ型はⅤbを改良した高々度戦闘型 1415HPのマーリン47エンジンを搭載して4翅のロートル・プロペラにしたもの。高々度での操縦性を考慮して主翼も先端がとがったものとなっている。その他はⅤb型と共通の部分が多い。写真の機体はONのコードレターをつけた第124中隊の所属機である。

〔上・下〕前ページ下と同じく第124中隊のスピットF Mk Ⅵ。同中隊はニックネームが「バローダ」(Baroda)。前身は1次大戦中の編成だが、実戦に参加することなく解隊。1941年にスピットF Mk Ⅰを装備して再編成され、逐次F Mk Va、Vbと二つの初型に機種を代えてドイツ領内のロケット陣地攻撃などに活躍している。スピットではこの2かHF Mk Ⅶ、HF Mk Ⅸe、F Mk Ⅸeなども装備しており、戦後の1946年4月にミーテアを受領して訓練中隊と改称している。写真は英本土の基地に待機中のものである。

ワイルドキャット & コルセア

〔上〕護衛空母"ナワイト プレインズ(CVE 66)"に配備されていた第4混成飛行隊(CV 4)のFM-2ワイルドキャット。全面シーブルーの塗装で、垂直尾翼の白三角が部隊マーク。機種が全面同塗りのものであるのに注意。エンジン・カウリング後方の胴部は排気のため塗料がはがれ白っぽく見える。1944年10月23日の撮影。〔下〕3色迷彩のFM-2で第7混成飛行隊(VC-7)の所属機。護衛空母"マニラ ベイ(CVE 61)"に着艦したところ。尾翼の白い山形印が部隊マーク。1944年10月15日の撮影。

エアラインの翼

KLM　オランダ航空　④

〔上〕アムステルダム―ウイーン　アムステルダム　ストックホルムとたてつづけに国際新路線を開設したKLM!　1936年7月に導入されたベストセラー　エアライナー　ダグラスDC 3。同機を装備したのはヨーロッパの航空会社では最初であった。客席は21席まで設けられたが　長距離のジャカルタ線は11席であった。本機の投入で　ジャカルタ線は週2便から3便となり　飛行時間もDC 2による37時間から55時間に短縮された。DC 3は38年12月　初めて南アフリカへも翼をのばしており　戦後の1948年まで使われている。

なお　1938年末現在のKLMの保有機はつぎの45機であった。フォッカーF 7a×2　同F 9×1　同F 18×3　FK 43×1　カーリイ　フレイター×1　ダグラスDC 2×18　DC 3×21　ロッキード14×4。

〔下〕これも1938年春　欧州の航空会社にさきがけてKLMが装備したロッキード14スーパー　エレクトラ。乗客10人乗り　戦後の1949年まで使われている。

〔下〕ブリュスターF2A 1バッファロー戦闘機 アメリカ海軍の制式機で初めての単葉戦闘機 オランダやイギリス空軍にも輸出されて 大戦初期の頃 極東アジア方面で日本機と戦ったのはご存知のところ。
本機を装備した海兵隊の最初の部隊は第221戦闘飛行隊（VMF 221）で F2A 2と共に1941年末に編成を終えている 写真の機体は主翼先端と方向舵を白く塗っており 機動演習でも使われた機体であろう。